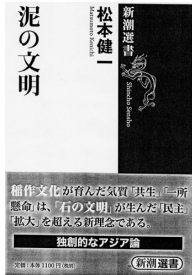


※ 書 評



松本健一著

(新潮社 2006年6月刊)

『泥の文明』(新潮選書)

賀 戸 一 郎

(B6判 239頁)
(1100円(税別))

I

松本健一氏は現在、麗澤大学国際経済学部教授として活躍されていると同時に、評論・評伝・小説など多方面で執筆されている方である。これまでに公刊された著書は、『白旗伝説』、『北一輝論』(以上、講談社学術文庫)、『竹内 好「日本のアジア主義」精読』、『大川周明』(岩波現代文庫)、『近代アジア精神史の試み』(アジア太平洋賞受賞)、『評伝 佐久間象山(上・下)』、『地の記憶をあるくく出雲・近江篇><平戸・長崎篇>』(以上、中央公論新社)、『日本の失敗(東洋経済新報社)』、『丸山眞男八・一五革命伝説』(河出書房新社)、『三島由紀夫の二・二六事件』(文春新書)『「日の丸・君が代」の話』、『民族と国家』、『砂の文明・石の文明・泥の文明』(以上、PHP新書)など多数ある。『評伝 北一輝』(全5巻・岩波書店)で、2005年度の司馬遼太郎賞と毎日出版文化賞を受賞されている。

松本氏は世界を歩き、縦横に思索を広げた独創的文明論者である、と評者は思う。

II

松本氏の新著が公刊された。『砂の文明・石の文明・泥の文明』(2003年)の続編(姉妹編)である。前編の「あとがき」でも、本著は学問的成果といっ

た種類の本ではない。かと言って、刻々と変化する歴史の現場に立とうとするジャーナリズムの報告でもない。歴史と現在とを視野におさめつつ、著者が考えつけてきた文明論的考察とでも言ったらよいだろうか、と述べている様に本著も本質的には同じであると評者は思う。

本著は、本文が4つの章で構成されている。それぞれの章の構成項目は、以下の通りである。

序「泥の文明」への道すじ

第1章 泥の風土

1 アジア・グリーンベルト 2 カリマンタン島・キナバル山を中心として
3 「内に蓄積する力」4 和辻哲郎『風土』をめぐる 5 「モンスーン」風土とは 6 「自然」と「人工」

第2章 泥の文明

1 「泥海」の風土を作り変える 2 稲作文化の成立 3 方形・水平の水田づくり 4 長江文明は「泥の文明」である 5 「アジア文明の博物館」（岡倉天心） 6 米づくり民族の倫理

第3章「泥の文明」としての日本

1 日本の土地に根ざして 2 「水に還る」インドと日本 3 国境は曲線 4 輪廻転生と「永遠の今」 5 「土地」とは何か 6 「定住」と共同体

第4章「泥の文明」の世紀

1 「もの作り」の文化 2 西田哲学、そしてグローバリズムの失敗 3 「国民国家」を超えて 4 「共生」という理念 5 アジア・コモン・ハウス（アジア共通の家） 6 21世紀の文明と日本

あとがき

主な参考文献

III

本著の全容を紹介する前に、ここでは松本氏の「文化」と「文明」に関する見解について、前編の第1章「文化と文明の違い」から解説することにする。

「文化」とはそれぞれの民族が固有に持っている個性的な暮らし方であり、伝統であり、風習である。普遍的な文明からすれば野蛮人のように見えるかもしれないが、それぞれの土地や風土、自然に合ったかたちで、それぞれの生活を営んでいたのである。それぞれの暮らしから編みだされる個人と共同体の守り方、それゆえの価値観といったものに従ったかたちがある。これはまさに、個々の民族が持っている文化と見たほうがいい。「文化」とは「民族の生きるかたち」、と言い換えることができる。

これに対して「文明」とは普遍的なものであって、非常に使いやすいものである。それゆえ文明は、一つの民族や地域に固定することなく、グローバルに浸透して行く。例えば近代西洋文明で言うと、自動車というものが非常に便利で生活に役立つと思えば、強制されなくても誰もが手に入れようとする。そうして普遍的なものの考え方や文物が文明によってもたらされるのである。

しかし翻って言うと、普遍的なものというのは、常に次の新しい普遍的なものに取って代われる可能性がある。だから「文明は普遍的であるが、それゆえに必ず滅びゆく」ものである。それに対して文化は、その民族の生きる固有のかたちだから、それぞれの時代の文明に応じたり、あるいはもっと時代に合ったかたちに変容することが必然化される。そのため、「文化は変容しつつも滅びない」ものである。

IV

本著の全容を簡略にまとめると、以下の通りである。

著者は世界を「石」、「砂」、「泥」の三文明に分けることができると考えている。「石の文明」すなわち欧米文明は「外に進出する力」を本質とし、「砂の文明」であるイスラム文化圏は「ネットワークする力」が本質だ、と捉えている。アジアに広がる「泥の文明」は「内に蓄積する力」が本質だ、と捉えている。そしてこのアジアの文明すなわち「泥の文明」こそ、近代社会を牽引してきた欧米の「石の文明」の欠点を補える唯一の文明だという独創的なアジア論を唱えている。

著者は本書で、米国中心の「民主主義」だけが普遍的理念ではないことを主張し、「リベラルな民主主義」こそが文明の最終理念とする S. ハンチントン

やF. フクヤマのブッシュ政権を支える米国の国際政治学者たちに強く反論している。但し、ネオコン（新保守主義）を自認してきたF. フクヤマはその後、ブッシュ政権の対外政策を支える政治思想を歴史的視点から検証し、イラク侵攻を主張したネオコン学派を批判して決別宣言をしている。「リベラルな民主主義」という理念によって敵・味方を区分して、世界を一つの家にしよとするブッシュ政権の戦略は、わが国の戦前の「八紘一宇」と発想が似ている。イラク戦争は侵略とまでは言わないまでも、かなり無理があった、と論じている。

著者は、米国のグローバリズムに象徴される「外に進出する力」がテロや貧困などの歪みを生み出しており、社会的弱者を抱え込んで「共生」するアジアの「泥の文明」がこの欠陥を補える、と考えている。21世紀においては「民主（主義）」と「共生」を同時に成し遂げることが大切になってくる。自由な競争は、富める国と貧しい国の格差を生じさせる。競争に敗れた者、社会的弱者、病者などを抱えてどう「共生」していくかに目を向ける必要があると、主張している。

更に日本国内においては、丸山眞男らの近代主義者たちは、日本の伝統的な「ムラ」や「共同体」をつぶさないで真の近代市民社会は生まれないと考えてきた。実際、農村共同体は高度経済成長以降、ほとんど解体されてしまった。

しかし著者は、この考え方はおかしいと思っている。日本が都市化してしまっているいまこそ、ある種の共同体が必要ではないか。もしも個人、個人が砂のようにバラバラになれば、ドイツ人が擬制の共同体であるナチス国家に吸収されたように、根を持たない個人はやすやすと国家に吸収され、ファシズム国家が再び生まれてしまうからだ、と論じている。

著者は、三島由紀夫の『豊饒の海』（4部作）や遠藤周作の『深い河』で人間を含めた自然が輪廻転生するインドの「永遠の時間」を描いていることに注目し、西欧近代文学を学んだ優れた作家が個人的なフィクションを追及するなかでインドに向かったのはなぜかを考えるべきだ、と言っている。「人間を含めてすべては泥の中から生まれて泥の中に帰っていく」というのがインドの考え方である。地球の資源には限りがあり、2050年には世界の人口が百億を突破すると推測されている状況において、欧米の「石の文明」の「外に進出する

力」ではやっていけない。21世紀の日本は米国のグローバリズムに追随するのではなく、自らの「共生」の理念を外に示す必要がある。定住、水田稲作が主体のアジアは、「泥の風土」と言えるからである。確かに、これまで泥のイメージは、「泥くさい」、「泥まみれ」、「泥をぬる」というように悪かった。和辻哲郎も「風土」で、ユーラシア大陸文明を牧場・砂漠・モンスーンの3類型に分け、モンスーン風土を「受動的・忍従的」と「前近代的・封建的」だと見ている。

著者の「砂の文明・石の文明・泥の文明」という3類型は和辻説と似ているが、「泥の文明」をマイナスイメージとしてではなく、「勤労・勤勉・忍耐・正直・節約」とプラスイメージに捉えている。インド、中国、日本へと広がる「泥の文明」は自然に優しく、さまざまな民族が固有の文化を持ち、富める者と貧しい者、自然と人間が「共生」する。「泥の文明」圏には世界の人口の半数を有し、「内に蓄積する力」を秘めていると、論じている。

V

著者は「あとがき」で、わたしが「泥の文明」と名づけたことに対して、「泥」が文明を生んだりするものか、むしろ文明（人工）を無に帰すものなのではないか、という批判がもたらされたりもした。そのような人びとはおそらく、かつて西洋近代の文明を積極的に受け容れた人びとが農耕に根差した日本社会を「泥くさい」、と悪口をいったことの延長上にみずからを位置づけているのであろう。これに対して、農耕に根ざした日本社会や農本主義者は、西洋近代の文明や文物を「バタくさい」、「ハイカラさん」といって軽んじたりした。著者は別に農本主義者ではないが、定住し農耕をしてきた文明を「泥くさい」といって悪口を言うのではなく、そこに一つの社会秩序を認め、「共生」という理念さえ秘めていたことを評価しようとしたのである。素朴に言えば、「泥」こそが生命の根源であり、その「泥」のやわらかさ、あたたかさを足のうらに再び感じとらなければならないのではないか、とさえおもうのである、と述べている。

この独創的なアジア文明論は、アジアにおける歴史的な出来事に対するわが

国の深い反省と謝罪を前提とするならば、経済的、政治的、社会的な面から緩やかな連合体としての「東アジア共同体」実現に向けた具体的な取り組みの促進の要因の一つとなる、と評者は思う。またさまざまな学問・研究の面においても、共同・協働的な取り組みを促進させることになると思う。社会福祉の分野においてもここ数年来、「東アジア類型」の構築に向けた具体的な試みが行われている。日本社会福祉学会における韓国・中国・日本の3カ国間での学術的な交流や幾つかの大学間での学術的な交流や調査研究も少しずつ活発になって来ている。

著者のこの提唱に社会福祉の制度・政策の実践者や社会福祉の教育・研究者たちは、いま呼応することが必要であると、評者は痛感している。わが国は欧米で発展した近代的な社会福祉の制度・政策、社会福祉の方法・技術、教育制度・方法・カリキュラムなどを敗戦後から今日までの約60年間に本格的に導入し、学び続けてきているが、わが国独自の（固有な）社会福祉の制度・政策・方法・技術・社会福祉教育の方法・カリキュラムを国際会議などの交流の場で世界の人びとに向かって自信をもって発表したり、紹介できるものがいったい幾つあるのか。本来社会福祉は人びとの生活・暮らしにかかわる実践なので、一つの国や一つの地域が一つの文明・文化と深く関係するのは当然のこととして認識する必要がある。つまり、「石の文明」の中で作られ、発展してきた社会福祉理論・実践モデルを「泥の文明」の中にそのまま翻訳的に直移入・移植しても、わが国の独自の（固有な）社会福祉理論・実践モデルとして作り変え、発展させることは不可能であると思う。「泥の文明」、「泥の風土」の持つ特質を生かした社会福祉理論・実践モデルの構築が待望されている。ここ数年来評者が探求し続けている「共生（ともいき）の社会福祉理論・実践モデル」の構築に向けて、心強い味方を得た思いである。一方でこれからは、評者の力量と努力が問われることになる。他方で故・鶴見和子氏が生前に力説された生態学と民俗学を基底にした日本的な「内発的発展論」を視座に据えながら研究に精進したいと考えている。

最後になってしまいましたが、世界がいま「文明の衝突」の世紀を迎えていると思い、心配している人びとには、是非とも本書を一読して欲しい。

参 考 文 献

- ・松本健一（2003）『砂の文明・石の文明・泥の文明』PHP 研究所
- ・サミュエル・ハンチントン著／鈴木主税 訳（1998）『文明の衝突』集英社
- ・サミュエル・ハンチントン著／鈴木主税 訳（2000）『文明の衝突と 21 世紀の日本』集英社
- ・フランシス・フクヤマ著／会田弘継 訳（2006）『アメリカの終わり』講談社

西南学院大学人間科学部社会福祉学科